

## Ⅱ 講演会記録／Seminar



## ホロコースト・テロル・追放 ——新しいヨーロッパ共通の記憶とは？

ミヒヤエル・ヤイスマン  
辻英史 訳

### 1. EUに共通の歴史はあり得るのか？

今年〔2004年〕の前半、欧州連合〔= EU〕は新たな加盟国を加えて拡大を果たしました。さらに欧州憲法が加盟国の国民投票によって決定されることになっています。2004年12月にはボスニア＝ヘルツェゴビナに展開する多国籍部隊の最高指揮権がEUに委譲されました。これは今後の同様の事例のモデルとなるものとして象徴的な意味を持つ出来事であり、華々しく演出されました。このように、欧州連合は単なる経済・政治上の目的連合から政治的に統一された共同体へと決定的な一歩を踏み出しつつあるのです。

これまでの発展がいかに産みの苦しみに満ちたものであったとしても、また今後の歩みがいかに苦難の多いものとなるとしても、そして現時点で達成された合意がいかに不満の多いものであるとしても、EUは1992年のマストリヒト条約が指し示した目標を実質的に達成しつつあるのです。同条約をもってはじめて、共通のヨーロッパ市民権が制度化され、共通のヨーロッパ社会という政治的目標が設定されました。青地に12の星のついた旗は1986年に公式にEUをあらわす記章として定められましたが、これは以後の展開を先取りしたものだったと言えます。

欧州連合はみずから発足を宣言した以上、これからも政治的宣言を次々に発して自己の存続を内外にアピールしていくほかはありません。法規の制定、行政上の共同作業などばかりではなく、ヨーロッパが政治的文化的に自己をどのように理解するのか、という問題もここには含まれます。とりわけ、アメリカ合衆国の国際政治における指導的な地位が多く障壁に遭遇し、また妥協を余儀なくされている現在、このことは重要になってきています。さらに、欧州連合とトルコやその他の候補国との加盟交渉においても、EUがどのような政治的歴史的な輪郭をもつものであるのかを明確にしておくことは、交渉の際に最も重要であり、何がそうでないのかを確定するための前提なのです。漠然とした人権保護の規定の有無や、国家財政状況が一定の条件を満たしているか、といったことは、これから政治的に機能を発揮しようとする共同体に参加するために十分であるとは到底言えないのです。

EUが容易に抜けだせないジレンマに陥っているのは、まさにこの問題においてです。ヨーロッパ諸国の自己理解は、現在に至るまでそれぞれの国家のナショナルな歴史によって作り上げられ、ナショナルなものとして強化されてきました。それに対して、ヨーロッパ共通の自己理解なるものは国民国家を超越した彼方にある、不明瞭な一種の雰囲気のようなものとして捉えられていたのです。

別の言い方をすれば、欧州連合は自分たち自身の自己認識を固めるために、今や

はじめて自分たち自身の歴史を持つようとしているのですが、その必要としているすでに生じた事実としての歴史は、彼ら自身のものではないのです。ブリュッセルからのべつまくなしに発せられるさまざまな法令によって、EUは人々の日常に計り知れない影響を与えることはできます。将来ヨーロッパが何を意味し、どこに向かうのかを教えてください。しかしそうした方法では獲得することはできないのです。

ヨーロッパの歴史は断絶に満ちています。そのなかから、正当性を付与し共通の認識を形成することができるようなヨーロッパの共同性が作り出せるのでしょうか。その歴史から現実のヨーロッパの記憶を作り出すことは可能なのでしょうか。近年にヨーロッパの歴史について大部の著作をものしたなかにはジャック・ル＝ゴフ、ヴォルフガング・ラインハルト、ハーゲン・シュルツェがいます<sup>1</sup>。彼ら三人はともに現在に至る発展の目的論的な「前史」を書いたり、欧州連合の起源論を書いたりするという誘惑に打ち勝っています。これは彼らの優れた才能のなせる業であることは言うまでもありませんが、ヨーロッパの歴史というテーマ自体に掘るところもまた大きいのではないのでしょうか。EUの起源は20世紀前半の世界大戦の破局的な経験にさかのぼります。力と力の衝突と競り合いのなかでそれまでヨーロッパ共通であった全てのものは徹底的に焼き尽くされ、さらに冷戦の地表下でくすぶる溶岩と化してしまいました。こうして生じた断絶はあまりにも大きく、政治にしる文化にしる共通のヨーロッパの萌芽となるべきものはひとつも残らなかったのです。ジャック・ル＝ゴフが多くのインタビューのなかでしきりに強調しているように、世界大戦前のヨーロッパには構造的文化的な共通性が数多く存在していたのですが、それにもかかわらず現在、純粋にヨーロッパ共通の記憶というものを考えるとすれば、それは第二次大戦中のホロコースト以外にはあり得ません。ホロコーストにまつわる記憶は均質のものではありませんが、ヨーロッパの全ての国に存在しています。フランスの現代史家アンリ・ルッソが説くように、ホロコーストをめぐる記憶は、そこに「名誉回復」「司法化」「犠牲者化」「脱国民化」といった要素が渾然一体となっているがゆえに、新しい歴史的記憶のモデルとなりうるのです<sup>2</sup>。

ホロコーストはいかにも巨大な怪物性を持つ事件ではあります。しかしだからといってヨーロッパ共通の記憶を作り上げていく主役となり得るのでしょうか。ホロコーストに際してドイツが演じた役割と、スペインやスウェーデンのそれとの間には大きな違いがあります。どうしてホロコーストだけがヨーロッパ共通の記憶の支柱たりえるのでしょうか。ほかに挙げるとすれば、たとえば大戦末期の住民の組織的な追放があります。これも同じように戦争のもたらした破局のひとつですし、ヨーロッパ全体に関わる問題として等しく重大なものです<sup>3</sup>。これをヨーロッパ共通の記憶とすることはできないのでしょうか。ヨーロッパ特有の記憶とは、どんな基準によって定められ、どのような過去がそれに望ましいとされるのでしょうか。

## 2. ヨーロッパとなるために必要な歴史の条件

これが私がこれからこの場をお借りして扱いたい問題です。あるひとつの歴史的な事件が、ヨーロッパのすべての国家によって、少なくとも公式にヨーロッパに共通する記憶の一部として認められるためには何が必要なのでしょう。何が決め手になるのでしょうか。過去についての記憶が、国民国家で共有されているレベルからヨーロッパ規模で共有されるものへと、より上位のレベルへと移行するための条件とは、どんなものなのでしょう。ここで誤解を避けるために言っておきますが、問題なのは過去の歴史の実態、つまり事実としての追放や大量殺害が重要なわけではありません。そうではなくて、ここで話題にしているのは政治的に形成される記憶のある一部分なのです。こうした記憶はどのようにして新しい歴史に、欧州連合を統合する歴史になるのでしょうか。1945年のさまざまな出来事の記念日や記念行事がメディアによって報じられるたびに、新しい歴史が書かれ、広められ、教えられ、刷り込まれていっているように見えます。ある種の記念日、たとえばホロコースト記念日といったものがヨーロッパ中で増えつつあること自体、このことの証明になっているといえましょう。このわれわれがまさに体験しつつある事態は、成り行きを見ても構造を見ても新奇なものです。創成期にある国民国家ならば、自分たち固有の歴史を作り出そうとして、その起源をギリシャ時代やあるいはアダムとイヴにまでさかのぼらせることができました。しかし欧州連合はこうした手段を用いることはできません。ブリュッセルにつくられる予定のヨーロッパ博物館〔2007年開館予定〕がありますが、これはヨーロッパ思想のさまざまな系譜を展示するものであって、アレキサンダー大王の宮廷こそEC委員会の元祖である、などという説を開陳するものではないのです<sup>4</sup>。ざりとて、欧州連合が代表する新しいヨーロッパが、ロベール・シューマンやジャック・ドロール、ヴァレリー・ジスカル・デスタンやヘルムート・シュミットによってはじめてスタートしたのではなかったこともまたたしかです。とくに東方への拡大を達成して以来、欧州連合はその内部に数多くの過ぎ去ろうとしない過去を抱え込むことになりました。ここには数多くの学校があり、歴史教科書があり、歴史の授業がおこなわれています。そこで疑問が生じます。EUは例えてみればまだゆりかごのなかにいる子供のようなものですが、この揺籃期の欧州連合に向かって語り聞かせるのにふさわしいのは、どのような物語〔=歴史〕なのでしょう。

われわれは、その誕生に至るまでにあつたさまざまないきさつと、数多くの破壊的な出来事を語ってやればよいのでしょうか。おまえはその誕生を全世界が長く待ち望んでいた子なんだよ、世に救いをもたらさしめないにせよ、きっと世界を明るくしてくれるにちがいないと誇らしげに言い聞かせるべきでしょうか。あるいはその子の出生証明書ともいうべきEU憲法草案に控えめに書き記されているように、おまえは人権という特別の権利が保障されている地域の守り主なんだと言ってやるべきでしょうか。それとも、おまえがこの世でなにができるのか、われわれにも実のところよくわからないのであって、せいぜい幸せであることを祈るくらいしかできないのだよ、とその耳元に弱々しく告白すべきなのでしょう。この子供は、自分ではまだ何の歴史も作ってはいませんが、その顔つきにはすでに長い年月の年輪が刻まれていて、ま

るで大人びて見えるのです。

目の前で新しい政治的共同体が文化的歴史的にみずからを形成しようとしているわけですから、ここは歴史家の出番なのかもしれません。これまでの国民国家の歴史をひもとけば、そこに歴史の果たした役割がどのようなものであったか見て取れます。歴史は生まれたての国民国家にぴったりと寄り添い、優しく手を取って進むべき道とそうでない崖っぷちとを示してやったのです<sup>5</sup>。

### 3. 加盟候補国をめぐるドラマ

欧州連合の時代は始まったばかりです。ここはひとまずゆりかごのそばを離れ、部屋から出て、外から聞こえてくる声に耳を傾けてみましょう。庭や通りや広場から、風によっていろいろな意見が聞こえてきます。どうやら何幕もの劇が演じられているようです。過去の記憶は預金口座に預けられた貯金のようなものです。口座にはこれまでの貸し方借りがきちんと記録されているのですが、その貯金を新しい通貨に両替することになると、ひとつとはいつも損得勘定を誤魔化してしまうのです。いったいどんなレートで両替しようとしているのでしょうか。あるひとつの声にしばし耳を傾けてみましょう。

「いい加減に歴史にこだわるのはやめにしよう。そろそろ足を踏み出そうじゃないか。拡大するのは何も加盟国の数ばかりじゃない。視野も心も広くしよう。このままでは時間が経てば経つほど、ますます屋根裏部屋や地下の物置を引っかき回して昔の古い写真アルバムを探すことになってしまう」<sup>6</sup>。欧州連合の東方拡大に先立つこと数週間、ライプツィヒ書籍見本市の開幕演説において、チェコの作家でPENクラブ会長のイジ・グルーサはこのように述べ、ヨーロッパには過去の克服の新しい物語が必要なのだと力説しました。忘れて、歴史なしでやっていくって？ もう20年以上にわたって記憶を共有する社会として自分たちを定義してきたドイツのような社会からみれば、このようなユートピア的決断主義はまことにスキャンダラスに聞こえます。もっとも、グルーサのいう忘却はさほど過激なことを意図しているのではないようです。彼は、忘却の技法とは「忘れっぽくなるのではなく、穏和な記憶のことであり、お互い対立して語るのではなく、共同して語る」ことだと言います。忘れられるべきは蛮行ではなく、そうした蛮行が現在に至るまで悪しき土壌として存続しているという考えなのです。こうした新しい記憶のなかから、新しいヨーロッパというイメージが浮かびあがってくるのです。そしてさしずめそれはあたかも天使のようにブリュッセルの空を舞うことになると申せましょうか。

ヨーロッパと欧州連合は、多くの悪しき土壌を持っています。我々がそのことにいつも思いをはせたり、他者の注意をそこに向けさせ続けるのであれば、それはろくな結果にならないとグルーサは言います。彼が言わんとしているのは、ハラルド・ヴァインリッヒが「満ち足りた記憶」と呼び、満たされていない、つまり憎悪や敵対を呼び起こすような記憶と対置したものです<sup>7</sup>。現実の政治の世界に即して言えば、誰にも何ら反省を強いたりせず、また売り言葉に買い言葉のケンカ状態を作り出すわけでも

ない記憶のあり方というものがあられるということでしょう。とはいえ、それはまだ生々しい記憶であるのですから、それが人々にどのように求められ利用されていくのかは、はっきりしないものでもあります。すなわち、過去の記憶は、人々がそれをまだ必要としているかぎり、それを利用しようとするさまざまな敵対する勢力同士の闘争にまきこまれることをまぬがれないのではないのでしょうか。ある過去についての記憶が、特定のグループの内部に対してその団結を強める働きをするような満ち足りたものであることは可能かも知れません。しかし団結を強めることは、潜在的に亀裂を生み出すことにもなります。政治的な記憶にあっては、つねに自他の区別をおこなうことが付きものだからです。政治的な記憶は、何が思い出されるべきかを指し示すと同時に、それに含まれないものとして思い出されるべきもの、つまりアウトサイダーをもはっきりと指し示すのです。ヨーロッパ全体に関わる記憶はいくら普遍的なものであるとはいえ、こうした自他を識別する標識になり得るのであり、武器にもなり得るのであり、したがって自分たちとは異なっているものにとっては悪しき土壌になるのです。

ヨーロッパ共通の記憶をめぐるのは、何幕ものドラマが演じられていると申しました。その第2幕は、同じく2004年初頭のライブツィヒ書籍見本市から始まります。イジ・グラーサが、彼の唱える甘美なる忘却への憧れを表明し、第一世界大戦後、大戦の狂気の記憶に悩まされることから逃れようとしてそれを忘れようと努めたPENクラブの創設者たちに連帯を表明したのと同じあの時です。ラトヴィアの外務大臣で、その後欧州委員になったサンドラ・カルニエテ女史が登壇し、欧州連合における記憶に関する、短いが胸を打つ演説をおこないました<sup>8</sup>。まず彼女はフランスのシラク大統領の主張する、EUには「古いヨーロッパ」と「新しいヨーロッパ」が存在するという主張を退けます。「古いヨーロッパ」は、昔からの歴史的な記憶を培っているが故に、政治的先見の明を兼ね備えるに至っており、したがって新しくEUに加盟する東欧の諸国の先導役を務めなければならないというのがシラク大統領の持論でした。それはおかしい、とカルニエテ女史は言います。この半世紀というもののヨーロッパの歴史は、ソヴィエト連邦によって占領され支配された諸国民を抜きにして書かれてきました。それどころか、第二次世界大戦終了後もソヴィエトの影響圏内ではジェノサイドが続いていたというのに、そのことは完全に黙殺されてきたのです。ベルリンの壁崩壊後に開かれた文書館の史料が証明しているように、ナチズムと共産主義というふたつの全体主義は共に同じように犯罪的であったのです。そして、たまたま一方の体制、つまりナチズムが敗北を喫し、他方の共産主義が戦勝国の陣営に属していたというだけで、この両体制のどちらがより非道で、どちらがよりマシであるというような判定をおこなうことは許されないのだ、と彼女は主張します。この間違いを修正することは、彼女の世代の義務なのだというわけです。こうした優劣の判定をすべて放棄すること、20世紀のヨーロッパの歴史を相互に関連するものとして見ること、そして人々の受けてきた苦しみに序列をつけるのを止めること、これが彼女の結論です。これこそヨーロッパ全体でひとつの統合された記憶を作り出していこうとする明確な意思表示です。欧州連合の東方への拡大とともに、歴史の拡大もなされるべきなのです<sup>9</sup>。

ドラマの第二幕は以上のようなものでありました。しかし、多くの人はここで言わ

れたことを当たり前のように感じ、もし、このときある人物が立ち上がって、新しい普遍的なヨーロッパというこの物語のもつ意味を明確にしなかったならば、この重要性を見逃してしまったかも知れません。その人物とは、ドイツ・ユダヤ人中央評議会委員のザロモン・コルンでした。カルニエテ女史のスピーチがまだ終わらないうちに彼は席を蹴って退出し、抗議の意志を示したのです。なぜでしょう。そのことは彼自身数日後に明らかにしました。コルンの主張はこうです。ナチズムの絶滅政策は空前絶後のものであり、その限りで他と区別されるべきものだけというのです。「ナチズムの殲滅的反ユダヤ主義に類するものは歴史上皆無」なのであり、何百万もの人々を工場のように組織的に殺害するという唯一無比の出来事でした。ナチズムによる恐怖政治の支配を旧東独社会主義統一党の共産主義体制下の独裁と同列に並べて語ることは、歴史的に見ても許されないとコルンは言います<sup>10</sup>。次期欧州委員ともあろう者が、カルニエテの発言は視野狭窄にとらわれたものである。反ユダヤ主義の風潮が東欧で巻き返しつつあり、また南東ヨーロッパ出身のムスリムたちを通じて欧州連合内部に進出しつつある昨今において、カルニエテ女史のような発言はその先棒を担ぐことになるおそれ大である、と断じました。これに対しコルン自身が擁護するのは、ヨーロッパの多くの国々で国家主導のもと推進され定着している記憶のあり方、すなわちホロコーストを第二次世界大戦を代表する事件として問題の中心に据えるものです。このような記憶の取り上げ方は、戦後のヨーロッパの記憶のあり方を180度変えるものでした。1970年代に至るまで、戦争といえば連合軍による空爆のことであり、独ソ戦のことであり、被追放民のことでありましたが、これらの事件はその記憶が徐々に薄くなるにつれ、国民のアイデンティティー付与の源泉としての役割は小さくなっていきました。それに代わって大量虐殺を中心とする戦争の文化的な記憶という要素が次第に浮上してくるようになりました。〔戦争終結記念日の〕5月8日は敗北を記念する日とは、少なくともそれだけの意味しか持たない日であるとは見なされなくなり、その代わり、リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー大統領が1985年に連邦議会でおこなった演説で述べたように〔ナチズムの蛮行からの〕解放の日として理解されるようになったのです<sup>11</sup>。

コルンによれば、サンドラ・カルニエテの唱える統合された単一の記憶のあり方は、さまざまな戦争の被害者たちを同列に置くことによって、こうしたホロコーストをめぐる特殊で、かつ普遍的な記憶のあり方を傷つけるものであり、また同時に一種の隔離の装置として機能することになります。なぜなら、もしユダヤ人がホロコーストは特殊で他に隔離した事件であったと主張し続けるならば、カルニエテの発言の当然の帰結として、それはヨーロッパで共有される記憶となることはできず、外部へと排除されざるを得ないからです。このことは過去25年にわたって努力を注ぎ、達成したことを放棄する以外の何ものでもありません。さらに、また別の要素があります。ホロコーストの記憶は、先に述べたように教育的な意図をもって作り上げられてきたのですが、最近のヨーロッパ外からの移民の流入という事態のもとで、マイノリティである移民が多数派である受け入れ側の社会に対して突きつける罪の記憶と変じつつあるのです。こうしてみると、ホロコーストの記憶はそれをもとにさまざまな社会集団が共通の地歩を占めうるようなものではなく、ましてそうした幻想を抱くことができるようなものでもありません。むしろ変化が加速しつつある時代にあってはさまざま



まな社会集団のあいだに亀裂と対立を生みかねないものなのです<sup>12</sup>。

ヨーロッパ統合のプロセスはホロコーストの記憶を作り出しましたが、このことはアメリカ合衆国における同様の展開と合わせて考えると、迫害の歴史が相互のコミュニケーションを可能にするようなメディアを作り出したのだということができましよう。ナチズムの迫害と絶滅の政策が、ニーチェの言葉を借りれば「ヨーロッパ人の相互接近」の道具となったのです。

さて、記憶をめぐるドラマの第三幕を見てみることにしましょう。今日ヨーロッパが多く、そして多様な賛美者を持つにいたったのは偶然ではありません。これは以下のことを見れば明らかでしょう。ホロコーストと、ドイツ国防軍による占領に際しての蛮行、あるいはドイツ系住民の追放や連合軍によるドイツ本土の空爆といった出来事は、それぞれ相互に独立して発生したとは見なされず、したがって非難合戦の論拠として用いられることはなくなっています。これらの悲惨な事件は相互に関連したものとしてとらえられ、果てしなき責任追求のメカニズムがそのために始動させられることはないのです<sup>13</sup>。

こうした流れを見る限り、ベルリンに計画されているいわゆる反追放センターは、それが実際に設立されたあかつきには、報復主義の温床となり、[かつて奪われた被追放民の奪われた財産の]権利を主張し回収することを目的としているプロイセン信託会社の支店のようなものになってしまうことでしょう。たしかに前社会民主党幹事長のペーター・グロツのような報復主義とは無縁の人物も2000年9月の反追放センター財団の設立に関与してはいました。グロツが望んでいるのは、彼自身の言葉によれば「追放という問題について、ドイツ全体で、またヨーロッパ規模で議論していくためのセンターとなるような記念碑」ということです。このような、さまざまな被害者集団をそれぞれ特別視せず、ひとまとめにして扱うという姿勢は、ホロコーストをめぐる取り組みにもみられたものです。しかし、いかに追放を普遍的な現象としてとらえようとしているとしても、その実質をなすものはあくまでヨーロッパ中心のものなのです<sup>14</sup>。

グロツは、反追放センターは「エスニック・ナショナリズムや外国人の敵視に反対する」と述べています<sup>15</sup>。このセンター設立に反対の態度を表明している連邦首相のゲルハルト・シュレーダー[在任2006年まで]とは同じ社会民主党に属しながら意見を異にしているということになります。このセンターは、極右勢力のようなドイツがエスニック的に同質な国民国家であることを要求し、追放のような手段もまたやむを得ないとする勢力と対決していくことに役立つのである、とグロツは主張します。2004年4月に東欧諸国が欧州連合に新たに加盟を果たす直前、欧州安全保障協力機構[OSCE]はベルリンで大規模な国際会議を開催し、ヨーロッパにおける反ユダヤ主義の問題を話し合いました。このような共通の接点がある限り[反ユダヤ主義は極右勢力の主張のひとつでもあるため、センターが極右との対決に役立つものならば、それは反ユダヤ主義への反対の意味をもつことになる]、理論上は反追放センター基金も被追放民協会も頭から拒否されることはないのです。つまり、東西冷戦の終結と共に、被追放民たちは、みずからの運命を20世紀および21世紀初頭の根本的な歴史的経験を体現するものとして語るができるようになったということです。この追放

という経験は20世紀を彩る対立の歴史の中心的な要素でもありますし、人種にもとづく政治の危険という点でも代表的なものであります。過去の出来事として受けとめられ、政治的な武器としても権利の主張としても用いられなくなってはじめて、追放の経験は敵対する立場の双方で別々に語られることをやめ、犠牲者同士の間で誰がより酷い目にあったかを競いあうことから自由になって、歴史へと変容を遂げることができるのです。コソヴォにおけるアルバニア系住民や、それ以前のボスニアにおけるムスリムたちの経験への関心、また旧ユーゴスラヴィアにおけるドイツ連邦軍の平和維持活動への参加は、それまで絶望的な苦難の思い出であり、あるいは他国に対する妬みとして固定化されてしまっていた追放という過去を、ヨーロッパ全体で受け止めていくことを可能にするうえで大きな役割を果たしたと言えます。

しかし、なお問題は残っています。追放というそれぞれの国に特有の経験が、どのようにしてヨーロッパの文脈に統合されるべきでしょうか。ドイツ社会民主党、連邦首相府、あるいはフリードリヒ＝エーベルト財団は、追放の経験を一国単位で考えることをやめるのが最善であろうという考えに傾いているようです。そうではなくて、学術的研究を推進することで追放がヨーロッパ共通の現象であったことを広く世論に訴えていこうとしています。20世紀の前半には多くの強制移住や追放がありました。このことはたしかにヨーロッパの歴史の一コマとして記憶に留められるべきでしょう。しかしこの話にはいささか胡散臭いものがあります。ヘルフリート・ミュンクラーが最近論証したことですが、ヨーロッパの政治はここ数十年というもの、ホロコーストを議論の中心に据えることで被害者との連帯ばかりを強調してきました。その影で加害者であった側面には注意を払わなくなってしまっているのです<sup>16</sup>。

#### 4. 隔離されたユダヤ人——ヨーロッパ化の媒体

記憶をめぐる闘争の検討を締めくくるにあたって、どうすればヨーロッパ的な記憶が可能になるのかという問題を見ることにしましょう。2000年2月のホロコースト会議以来、欧州連合と諸国の支援のもと、ヨーロッパ統合の最大の共通分母としてホロコーストを軸に結集しようとする動きが見られます。しかし、この考えを推進する上で役に立たない、あるいはもっと悪いことにヨーロッパ統合を推進する立場にとっては障害になるような歴史的事件が存在するのです。たとえば1915年のオスマン帝国によるアルメニア人の虐殺があります。ホロコーストと同様この事件は世界人権宣言の出発点になっています。しかしながら、ドイツ連邦共和国は隣国フランスと違って、この民族虐殺を当時現地にいたドイツ軍が手をこまねいて傍観していた事実があるというのに、議会で公式に事実であると認定するには至りませんでした。〔虐殺の認定はトルコのEU加盟に不利になるため〕トルコ人の友人たちや、社会の民主化に対するトルコ政府の努力を見殺しにするには忍びないというのです。

ナショナルな記憶は、その国民国家の安定化と保持のための機能を、新たに登場してきたより上位の政治的行動単位のために失いつつありますが、多くの人々にはそのためかえて信頼に値するものと受けとめられていることは、別に驚きではありません。

せん。ベネシュ布告〔1945年、当時のチェコスロヴァキア大統領エドゥアルド・ベネシュが発した、チェコスロヴァキア在住のドイツ人などを追放する命令〕をめぐる議論〔チェコに対し、EU加盟を前にベネシュ布告を撤回するようドイツを中心に国際的な世論が高まり、それに対してチェコが反対の姿勢を貫いたことを指す〕をみてもわかるように、自分たちに固有の記憶の一部をヨーロッパ全体に妥当するものとして書き写すことは、別に不可能ではありません。しかしそこにはつねにある種の危険がつきまといまいます。つまりそうするものは他者からこのように非難されるのです。昔ながらの古い敵対の記憶をいつまでも持ち続けてどうするのだ、過去の権利をいつまでも手放さず、未来のためにそれを確保しようとしているのではないか、と。

私のみるところ、ヨーロッパに共通の記憶のあり方を決定する基準とは以下のようなものです。そもそも欧州連合が新しい行動主体にして新しい座標単位として成立した結果、集団的な政治的記憶に関わる全ての事柄が再調整されることになりました。それはとくに国家間の政治のレベルでおこなわれました。より下位にある小さな地域のレベルでは、過去の記憶について独自の解釈がそのまま維持されることもままありましたが、政治のレベルにかぎればホロコーストという事件が——私はこの概念を使うことでそれがあたかもひとつの公式のように機能していることを強調したいのですが——、ヨーロッパ共通の記憶の中心的なカテゴリーとして不動の位置を占めるようになったのです。この記憶は政治的価値を与えてくれるという意味で誰もが共有することができます。追放に関するさまざまな事件の記憶との違いはあきらかです。ホロコーストを負の建国神話とすることで、ヨーロッパの統一は達成されるのです。もちろん一筋縄ではいかないでしょうが、それが可能となるのは、迫害され殺害されたユダヤ人たちを、敵味方の範疇を超えた第三者として位置づけることができるからです。追放の被害者たちとちがって、ユダヤ人は、国家間関係においてどちらの陣営に与することもない局外の中立的存在であることができるのです。つまり、かつてドイツ人、フランス人、ポーランド人、あるいはまた別の国の国民であったユダヤ人は、ホロコーストを経験することでヨーロッパに共通の普遍的存在すなわちヨーロッパ化した存在となりました。ホロコーストの記憶は、次第に国家間を横断する意義を持ち、統一性を与える機能を果たしつつあります。かつては反ユダヤ主義が同じような役割をもっていたのですから、そのことを考えるとこれは歴史の皮肉とも言えるでしょう。

ともあれ、ホロコーストに関連してヨーロッパ共通の記憶を作り上げるという政治的課題は可能となったのは、このようにユダヤ人が「ヨーロッパ化したユダヤ人」となったことがあればこそでした。一方で、ホロコーストを生き延びたユダヤ人のうち少なからぬ数の人々が、戦後かつて帰属していた国家からすんで自らを引き離し、ここでも別の意味でヨーロッパ化を遂げました。アルトゥール・ケストラーは、1950年、彼の忠誠心のありかと帰属するところを訊かれて、こう答えています。「私は自分をまず第一にヨーロッパ共同体の一員であると見なします。第二に、人種の入り交じった不確かな出自をもっていますが、イギリスに帰化し国籍を取得した人間であると見なします。そうした人間として、古代ギリシャ・ユダヤ教・キリスト教の諸価値を受け入れますが、それぞれのドグマは拒否しています」<sup>17</sup>。このようなユダヤ人のアイデンティティーの階層の最上位に位置するのがヨーロッパですが、どうしてそうなる

のかは決して自明のことではありませんでしたし、いまでもそうです。このユダヤ人自身の自己のアイデンティティーをヨーロッパに求めることと、先に述べたようなホロコーストに関する政治的な記憶の形成を通じてユダヤ人がヨーロッパにおいて中立で普遍的な存在となることと、この二つのヨーロッパ化はどうやら共に手を携えて進化したようです。別の言い方をすれば、ユダヤ人がかつての国籍から身を引き離し、ヨーロッパ化していくことは、同時に彼らを〔いまだ国籍にとらわれている諸国民から〕分離し、隔離することにもなったのです。

こうしたユダヤ人の隔離は、微妙なものでありますが、また効果的なものでもありました。追放の歴史とその記憶が、なぜ一義的にヨーロッパ共通の記憶の構成部分となることができないのか、これで明らかだと思います。追放のおこなわれた根拠は、言うまでもなく個人の特定の国家への帰属です。そしてこの国籍という概念こそ、過去の記憶をめぐる政治が抹殺しようとしているものであり、それが成功したあかつきには、追放をめぐる記憶もまた根拠を失うことになるでしょう。最近第二次世界大戦中の損害に対する補償をめぐる突如激しい議論がまきおりましたが、それにより明らかになったのは、この領域では人々がまだまだ敏感に反応することであり、追放がヨーロッパの「満ち足りた記憶」となるにはほど遠いと言うことでした。つまり、追放という過去の事件の記憶においては、被害者と加害者の関係を何かほかの第三者の介在によって沈静化することができず、そうした第三者の存在を手がかりにして国家を超えた関係を築いていくこともできないのです。したがって追放が記憶のヨーロッパ化の媒体になることは不可能なのです。

ヨーロッパの記憶を語る際について根本的なことが忘れられてしまっているようですが、かつてヨーロッパはうち続く戦乱と競合関係によって特徴づけられていました。それが現在ではひとつの大きな平和と統合の地域となっています。しかし戦火はおさまったとはいえ、対立がヨーロッパからその後いっさい姿を消したわけではありません。むしろ近年では移民や移住の増加により、かつては比較的同質であったヨーロッパ社会は文化的宗教的に複数化しつつあります。

だからこそ、ふたつの世界大戦という根源的破局の記憶をもとに、ヨーロッパ的なものの新しい基本理念を作り出すことが必要になっているのです。この基本理念のひとつが、政治的な単位は〔かつてのナチズムの時代のように〕ユートピア的な救済への期待や癒しへの願望を真っ先に押し立てるものであってはならない、ということであるのはたしかでしょう。新しいヨーロッパは徹頭徹尾現実に即したものでなくてはなりません、その理念を敵に抗して守っていこうとするならば、現実ばかりに目を奪われていてはならないのです。トルコの欧州連合加盟に向けた交渉は、その際ひとつの手がかりを与えてくれるものです。両世界大戦とホロコーストという根源的破局の記憶があるかぎり、いかにすさまじい体験の末にヨーロッパの人びとがその新しい叡智を得るに至ったのか、そのことは決して忘れ去られないでしょう。

さて、家に帰るとしましょう。ゆりかごの置いてあるところに、あのヨーロッパという寄り辺のない子供が寝ているところに。いつの日か、ゆりかごが空っぽになっていて、子供がわれわれの言うことを聞かずに己の道を歩み出したことに気が付いて仰天する日が来るかも知れません。しかしそれはまた別のヨーロッパの物語です。

- 1 Jacques Le Goff, *Die Geburt Europas im Mittelalter*, München 2004; Wolfgang Reinhard, *Lebensformen Europas. Eine historische Kulturanthropologie*, Hagen Schulze, *Phoenix Europa. Die Moderne. Von 1740 bis heute*, Berlin 1998.
- 2 Henri Rousso, Das Dilemma eines europäischen Gedächtnisses, in: *Zeithistorische Forschungen*, 1. Jg. 2004/3, S. 363-378. これに関してはほかに:Jörn Rüsen, Holocaust, Erinnerung, Identität, in: Harald Welzer, *Das soziale Gedächtnis. Geschichte, Erinnerung, Tradierung*, Hamburg 2002, S. 260-275.
- 3 Ulrike Ackermann (Hg.), *Versuchung Europa. Stimmen aus dem Europäischen Forum*, Frankfurt am Main 2003.
- 4 古代と現代のヨーロッパの関係については以下の文献を参照のこと:Peter Funke, Europäische lieux de mémoire oder lieux de mémoire für Europa im antiken Griechenland?, in: *Jahrbuch für Europäische Geschichte*, Band 3, 2002, S. 3-16. 啓蒙主義の時代に関して代表的な研究としては:Volker Steinkamp, *L'Europe éclairée. Das Europa-Bild der französischen Aufklärung*, Frankfurt am Main 2003; Fabrice Larat, Instrumentalisierung des kollektiven Gedächtnisses und europäische Integration, in: *Frankreich-Jahrbuch 2000*, Opladen 2000, S. 187-201.
- 5 これに関しては, *Zeithistorische Forschungen*, 1. Jg. 2004/3の「現代史のヨーロッパ化Europäisierung der Zeitgeschichte」特集を参照のこと。
- 6 PENクラブ会長イジ・グルーサによるライブツイヒ書籍見本市開幕記念講演(2004年3月25日)より。講演の全文は下記のURLにて入手可能(2007年1月現在)。  
<http://www.mdr.de/leipzig-liest/interaktiv/1290731.html>
- 7 Harald Weinrich, *Lethe. Kunst und Kritik des Vergessens*, München 1997, S. 168ff.
- 8 Sandra Kalniete, Altes Europa, neues Europa. Rede zur Eröffnung der Leipziger Buchmesse am 24. März 2004. 講演の全文は下記にて入手可能。  
[http://www.die-union.de/reden/altens\\_neues\\_europa.htm](http://www.die-union.de/reden/altens_neues_europa.htm)
- 9 この点に関しては:Helmut König, Michael Kohlstruck, Andreas Wöll (Hg.), *Vergangenheitsbewältigung am Ende des zwanzigsten Jahrhundert* (=Leviathan, Sonderheft 18/1998), Opladen, Wiesbaden 1998.
- 10 Salomon Korn, NS- und Sowjetverbrechen. Sandra Kalnietes falsche Gleichsetzung, in: *Süddeutsche Zeitung*, 31. 3. 2004.
- 11 この変化については拙著参照:Michael Jeismann, *Auf Wiedersehen Gestern. Die deutsche Vergangenheit und die Politik von Morgen*, Stuttgart, München 2001.
- 12 Viola Georgi, *Entlehene Erinnerung. Geschichtsbilder junger Migranten in Deutschland*, Hamburg 2003.
- 13 Dieter Binge, Wlodzimierz Borodziej, Stefan Troebst (Hg.), *Vertreibung europäisch erinnern? Historische Erfahrungen, Vergangenheitspolitik, Zukunftskonzeptionen*, Wiesbaden 2003.
- 14 これについては:Dieter Binge, u.a. (Hg.), *Vertreibung europäisch erinnern?* a.a.O.;および Mihran Dabag, Kristin Platt, *Genozid und Moderne*, 2 Bde., Strukturen kollektiver Gewalt im 20. Jahrhundert, Düsseldorf 1998.
- 15 Peter Glotz, Rede auf dem „Tag der Heimat“, Berlin 1.9. 2001.
- 16 Herfried Münkler, Unter Abwertungsvorbehalt. Vom Bombenkrieg bis zur Vertreibung: Seit einigen Jahren experimentiert Deutschland mit einer Politik des Opfers, in: *Frankfurter Rundschau*, 24. 9. 2003.
- 17 以下による引用:Christian Buckard, *Arthur Koestler. Ein extremes Leben 1905- 1983*, München 2004, S. 207.

## [訳者解説]

ここに訳出したのは、ミヒャエル・ヤイスマン氏が2004年6月22日にスイスのバーゼル大学でおこなった講師着任記念講演「ヨーロッパ化の媒体としての大量殺害と追放 Völkermord und Vertreibung als Medien der Europäisierung」の全文である。原稿はわずかな修正を経て *Historische Anthropologie*, 12 (2005), S.111-120. に収録されている。ヤイスマン氏はドイツ教育史研究者として高名なカール＝エルンスト・ヤイスマン教授を父親に1958年に生まれ、ビーレフェルト大学において故R・コゼレック教授のもとで歴史学を学んだのち、1993年からは『フランクフルター・アルゲマイネ』新聞の学芸欄担当として健筆を振るっている。氏のアカデミックな分野での主たる関心は過去のドイツのナショナリズムを、フランスなどの隣国やユダヤ人といった他者との関係を軸にとらえ直すものであり、ジャーナリズムの分野ではそうした歴史研究を踏まえたドイツの過去の克服や歴史記憶の問題、さらに政治評論が多い。刊行された著作としては、学位論文をもとにした *Das Vaterland der Feinde: Studien zum nationalen Feindbegriff und Selbstverständnis in Deutschland und Frankreich 1792-1918.* (Stuttgart 1992) および *Auf Wiedersehen gestern. Die deutsche Vergangenheit und die Politik von morgen.* (Stuttgart 2001) がある。現在は同紙編集部を休職してエッセンにある文化科学研究所において異文化間の結婚の歴史に関する著作を執筆中とのことである。なお、同氏が日本ドイツ学会第21回シンポジウム(2005年6月21日、於東京大学本郷キャンパス)においておこなった講演 (*Auf Wiedersehen Gestern. Die Vergangenheiten und die Politik von morgen*) は、『ドイツ研究』第40号(2006年)に収録されている。また氏の論攷の邦訳としては、ミヒャエル・ヤイスマン『国民とその敵』(木村靖二監訳、山川出版社、近刊予定)を参照されたい。

本稿はその成立が数年前に遡るため、ここに記載された状況は現在のものとは若干の齟齬を生じている。たとえば欧州憲法であるが、その後2004年10月に欧州憲法条約が締結され、各加盟国による批准に付されることになったが、2005年5月にはフランスで、6月にはオランダで、国民投票の結果相次いで否決され、この結果2006年10月と定められていた批准作業の終了期限が無期限に延長されている。欧州連合そのものも、2004年の東欧10カ国の新規加盟につづき2007年1月1日をもってルーマニアとブルガリアが新たに加盟し、全27カ国へとさらに拡大を果たしたが、加盟国間の経済的な格差はなお大きく、またEU内の移動の自由の一方で各国は移民や組織犯罪への対策として規制の強化を迫られるなど、「拡大疲れ」がささやかれている(『朝日新聞』、2007年1月4日付朝刊)。またこの間にアフガニスタン、イラク、レバノンとEU諸国は相次いでその域外へと軍事力の派遣をおこない、アメリカ合衆国との関係も途中波乱をまじえて変化してきたことは言うまでもない。

しかしこれらの国際政治上の変化にもかかわらず、欧州連合の内部での過去の克服から共通の記憶の形成、それを通じた統合の推進という、その基本軸の必要性に変化はないように見受けられる。たとえば、さまざまな政治的主張から20世紀ヨーロッパにおける追放や強制移住をとりあげる動きはその後加速しており、ドイツでは昨2006年夏に被追放センターの主催した展覧会「強いられた道——20世紀ヨーロッパに

おける避難と追放」をきっかけに議論が大きく進展を見たことは記憶に新しい。またアルメニア人虐殺に関しても、早くから公式に事実と認められていたフランスでは昨年10月に虐殺を否定する者に罰金を科す法律が制定されるに至ったし、トルコ国内でも、虐殺事件を積極的にとりあげていたアルメニア人ジャーナリストをトルコ人少年が射殺する(2007年1月19日)など、問題はますます混迷の度合いを高めている。

こうした事情をふまえると、本稿は発表後数年を経てなお意義を失っていないと考える。本稿はドイツおよびヨーロッパの共有しうる過去の記憶のあり方をめぐる努力を独特の視点から紹介するものであり、同時にひるがえって日本やアジアにおける過去の記憶のあるべき姿を考えると、貴重な材料を提供してくれるものといえよう。

なお、本稿は著者とのやりとりの中で一部修正した箇所を含み、原稿の脚注は章末にそのまま訳出した。本文中の〔 〕内に示したのは訳者が適宜加えた補足ないし説明である。